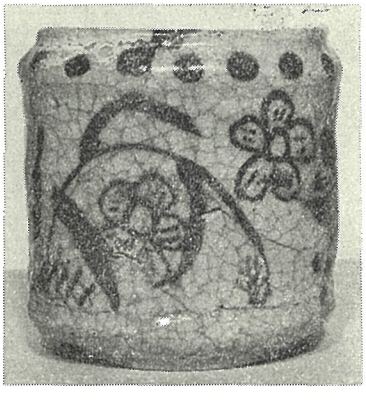
ドが同志社引退にあたって『同志社新聞』に寄せた文章にあわせて、他の文章とともに、河野仁昭氏が編集し、学校法人同志社が出版したものである。）

（大学神学部教授）

## 同志社校地出土の埋蔵文化財 (5)

鈴木　重治

### 絵志野四方向付



同志社女子大学図書館地点出土（江戸時代初期）
口径八・五㎝、器高九・三㎝、底径六・三㎝

当資料は、土師器の皿などを伴って、石積みの地下式貯蔵庫から出土したものである。石塔や墓石を転用して側壁とした地下式貯蔵庫は、東福門院の下屋敷に属したものと考えられている。宮内庁諸陵部で保管する寛永十四年（一六三七）の洛中絵図にみえる御国母様下屋敷がこれにあたる。

伴出の土師皿の型式上の特徴は、内底面と体部の境に、弱い段を残しながら、入念なヨコナデ調整を明瞭に認める点にある。胎土も密で、焼成も良好である。見込に深い沈線を篦によってめぐらす技法が出現する以前の一群である。したがって、考古学的な土師器の編年研究の成果に照しても、一七世紀の前半に年代が与えられることになる。

ゆるやかな起伏をみせる筒形の胴部は、適度な腰の張りによって安定観を与えている。透明の長石釉が器の内外にたっぷりとかけられていて、釉下に描かれている鉄絵は、体部をめぐって梅花文、千鳥文、草文などが、稚拙ながら雅味のある筆致でしたためられている。内底面には、四ヶの目跡が残り、重ね焼であることを示している。また貫入も多い。

史跡に指定されている岐阜県の元屋敷窯址から、同様の向付が多量に出土していて、生産窯址の想定も容易である。美濃産の陶磁器は、近世初頭から大量に京都に搬入されているが、それらの中でも、とりわけてすぐれた出土資料の一つといえよう。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）